

道徳的自律と道徳的基盤の枠組みから捉えた道徳的不活性化の特徴

首藤 敏元 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座
利根川 智子 東北福祉大学教育学部
樟本 千里 岡山県立大学保健福祉学部

キーワード: 道徳的不活性化、社会的領域理論、道徳的自律、道徳的基盤、若者

1. 問題の背景

道徳性(morality)は「人としてより善く生きようとする行為を生み出す社会的能力」(首藤, 2013)であり、感情、認知、意思、行動、自己といった人のあらゆる側面と関係する。そのため、それぞれの側面に焦点を当てた道徳性心理学のモデルや理論が多数存在する(日本道徳性心理学研究会, 1992)。本論文は、道徳の意思決定過程に焦点を当てたモデルから道徳的不活性化(Bandura, 1999)を取り上げ、個人での不活性化の傾向と道徳的判断(Turiel, 2002)という社会的認知の特徴との関連、及び道徳的感情と関連して判断よりも先に生じると考えられている直観(Haidt, 2001)と不活性化傾向との関係を検討することを目的とする。

Bandura (1999, 2002, 2016) は、道徳的概念が自己調整過程の不活性化により道徳的な判断や行動にはつながらず、非人間的な行為をも生起させることがあるという道徳的不活性化モデルを提唱した。不活性化尺度(Bandura, Barbaranelli, Caprara, & Pastorelli, 1996)を用いた研究から、不活性化傾向の高さと攻撃行動、ネットいじめ、不適切なしつけ、差別、企業犯罪、テロリズム支持と関係のあることが示された(Bandura, 2016; Bandura, McAlister, & Owen, 2006; Bussey & Bandura, 1999; Gini, Pozzoli, & Hymel, 2014; Killer, Bussey, Hawes, & Hunt, 2019)。わが国でも、大学生の社会的逸脱行動をもたらす認知の歪みに関する研究(吉澤・吉田, 2004)や小中学生のいじめ加害・傍観経験と道徳的不活性化との関連に関する研究(西野・若本, 2019)が行われており、道徳的不活性化傾向の社会的行動へのネガティブな影響が示されている。

Bandura の社会的認知理論以外にも、他者への危害や公正さの判断が求められる状況において、道徳的な思考が曖昧化されうることが以前から指摘されてきた。Piaget (1932/1953) の道徳発達理論を発展させた Turiel (2002, 2008a) による社会的領域理論(social domain theory)においても、領域概念の調整不全により、攻撃的行動を慣習領域の概念から解釈(例. 制裁はルールである)し、「悪いことではない」という判断を導いたり、行為を正当化したりすること(例. 叩かれたまままだと不公平だ)が仮定されてきた。首藤・利根川・樟本・上岡(2020a)は小学1年生から6年生までを対象にした研究により、道徳領域の核となる概念の「正義」を誘発する要素は「他者の苦痛」の認知であることを見出した。他者の苦痛の認知が道徳領域を活性化させ、その認知が道徳領域以外の要素によって抑制されることで領域概念の調整不全、つまり道徳的不活性化が生じると考えられる。そこで、本論文の研究1では、個人の道徳的不活性化の傾向と社会的領域理論の枠組みで捉えた道徳的判断の特徴との関連性を検討することを目的とする。

Piaget (1932/1956) に始まる道徳的判断の研究は判断と推論といった認知的側面に焦点を当て

てきたが、近年、道徳的な認知よりも、直観とそれに付随する感情を重視する理論が提出された。Haidt (2001, 2012/2014, 2013) による社会的直観者モデル (social intuitionist model) では道徳的判断は道徳的直観によって引き起こされ、必要ならばその後付けとして道徳的推論が続くとされる。そして、推論によって判断が覆されたり、直観が変更されたりすることはほとんどないと仮定されている。この直感を生み出す精神の基盤は人類が歴史的に社会適応する中で獲得してきたものであるとし、次の5つが仮定されている。つまり、「ケア (care) / 危害 (harm)」、「公正 (fairness) / 互惠性 (reciprocity)」、「内集団 (ingroup) / 忠誠 (loyalty)」、「権威 (authority) / 尊敬 (respect)」、「神聖 (purity) / 尊厳 (sanctity)」である。これらの道徳基盤 (moral foundations) は心のモジュールとして機能し、社会的な出来事を察知するセンサーであると仮定されている。最近、6 つ目の基盤として「自由 / 抑圧」が追加された (Haidt, 2012/2014)。Haidt (2012/2014, 2013) は、道徳概念の中心を正義、公正や自由のような個人の自律性の倫理に限定する考え方が欧米社会で高等教育を受けた産業化された民主主義文化に暮らす人々にしか適用できないことを指摘する。Haidt & Graham (2007) は、個人の自律の倫理に加え、人類が社会適応の過程で獲得した共同体の倫理や神聖の倫理も重視し、人類が進化的に獲得してきた多元的な道徳理論、つまり道徳基盤理論こそが全人類の道徳概念をカバーすると主張する。

道徳基盤理論は直観が判断を導くことを仮定しているため、直感を生み出す5つの基盤のパラメータが道徳的活性化と不活性化の個人差を作ると考えることができる。基盤理論にとって道徳的不活性化は認知の歪みではなく、直観の個人差ということになる。そこで、本論文の研究2では、個人の道徳基盤と道徳的不活性化傾向との関連を検討することを目的とする。

2. 研究 I

2-1 目的

首藤・利根川・樟本 (2021) は15歳から22歳までの青年を対象に、「正当化の歪み」、「解釈の歪み」、「評価の歪み」の3つの下位尺度から構成される道徳的不活性化尺度を作成した。そして、3つの下位尺度とも男性の方が有意に高く、全体的に社会人は学生よりも低いことを報告した。また、正当化の歪みは批判的思考態度尺度 (平山・楠見, 2004) の「探究心」と負に相関すること、内在的公正世界信念 (村山・三浦, 2015) と負に相関すること、サイコパシー傾向 (田村・小塩・田中・増井・カール, 2015) と正に相関することを報告し、尺度の妥当性を示した。本論文ではこの尺度を使用して、個人の道徳的不活性化傾向を測定する。

首藤・二宮 (2002) は社会的領域理論の立場から、複雑な社会的状況に遭遇した際に、道徳 (moral)、慣習 (conventional)、個人 (personal) という3つの領域の概念を能動的に調整し、ひとつの判断と行動につなげることを道徳的自律 (moral autonomy) と定義した。Kusumoto, Ueoka, Tonegawa, & Shuto (2018) は児童期と青年期の道徳的自律には、領域の特徴にそって判断をする「領域対応型」、個人領域にも社会的規制が及ぶことを受容する「過剰抑制型」、道徳と慣習領域にも個人の自由意思を発揮させる「自由感肥大型」の3つのタイプがあり、「自由感肥大型」の適応感が最も深刻であることを示した。「過剰抑制型」と「自由感肥大型」は、方向は異なるものの、どちらも領域調整の歪みがあるタイプと考えられる。研究1では、Kusumoto et al. (2018) による社会道徳的判断尺度を使用し、個人の道徳的自律のタイプを測定する。

道徳的不活性化と領域概念の調整不全とはどちらも社会的認知のプロセスについての構成概念

であり、理論的根拠は異なるものの、両者の関連性は強いと考えられる。そこで、研究1では、18歳から22歳までの若者を対象にして、道徳的不活性化傾向と道徳的自律タイプとの関連性を検討することを目的とする。道徳的自律の領域調整不全（過剰抑制型、自由感肥大型）は道徳的不活性化傾向が高いことが予想できる。

2-2 方法

(1) 参加者

高校生（200名、男性50%、 $M_{age}=16.93$ ）、大学生（247名、男性45%、 $M_{age}=19.46$ ）、そして18歳から22歳までの社会人（200名、男性50%、 $M_{age}=22.01$ ）、合計647名が調査に協力した。高校生と社会人はオンライン調査会社のクロスマーケティング（株）がリクルートした。高校生と社会人の参加者は首藤・利根川・樟本（2021）と一部重複している。

(2) 質問項目

①道徳的不活性化尺度

首藤・利根川・樟本（2021）の開発した道徳的不活性化尺度が用いられた（Table 1-1）。この尺度は「正当化の歪み」、「解釈の歪み」、「評価の歪み」の3つの下位尺度から成り、合計9項目、6段階評定（1:全くそう思わない～6:とても強くそう思う）の尺度である。研究1のサンプルでの確認的因子分析の結果、尺度の適合度は十分高いことが示された（ $\chi^2=116.59$, $df=24$, $p<.001$; $CFI=.95$, $AGFI=.93$, $RMSEA=.08$, $SRMR=.04$ ）。尺度のクロンバックの α 係数は「正当化の歪み」.77、「解釈の歪み」.77、「評価の歪み」.68であり、調査研究を目的とする尺度としてはその内的整合性は高いと見なすことができる。

②社会道徳的判断尺度

Kusumoto et al.（2018）の社会道徳的判断尺度は首藤・利根川・上岡・樟本（2020b）の研究でも使用された。彼らの尺度は4つの下位尺度、つまり道徳、慣習、個人、自己管理（prudential）から成り、各下位尺度ごとに3項目、合計12項目あり、5段階評定（1:全く悪くない～5:とても悪い）の形式であった（Table 1-2）。確認的因子分析の結果、尺度の適合度は高いことが示された（ $\chi^2=157.18$, $df=48$, $p<.001$; $CFI=.96$, $AGFI=.94$, $RMSEA=.06$, $SRMR=.05$ ）。クロンバックの α 係数は、道徳.73、慣習.64、個人.89、自己管理.63であり、研究目的としては尺度の内的整合性は十分であると見なすことができる。

(3) 手続き

大学生には質問票は授業の中で配布され、授業後の空き時間に実施後、回収された。また質問票と同じものをGoogle Form上に作成し、オンラインでも回答できるようにした。回答時間は約10分であり、回収率は92.5%であった。高校生と社会人はオンライン調査会社が大学生と同じ質問票をオンライン回答用に画面レイアウトして実施した。

(4) 倫理的配慮

無記名式の調査であった。参加者には教示文の中で、回答は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、大学生の場合は授業の成績・出席とは関係しないことが強調されていた。回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなした。高校生と社会人の場合は、調査会社のリクルートに自発的に応じた参加者であるため、回答の任意性はクリアしていると判断した。

Table 1 道徳的不活性化尺度の確証的因子分析の結果

項目	確証的因子分析結果			
	負荷量	共通性	平均値	標準偏差
因子1—正当化の歪み, $M=1.98$, $SD=1.00$, α 係数=.77				
人はいじめたり, いじめられたりしてこそ成長できる	.70	.49	2.09	1.25
子ども同士のいざこざ程度で子どもの心に傷ができることはない	.77	.60	1.79	1.11
意地悪な子をこらしめるためなら, その子の持ち物を隠してもよい	.72	.51	2.06	1.24
因子2—解釈の歪み, $M=2.51$, $SD=2.33$, α 係数=.77				
子どもが人を叩いたり押ししたりするのは, ただの冗談に過ぎない	.63	.40	2.78	1.24
子どものいじめは, 子ども同士のじゃれ合いやふざけ合いの延長に過ぎない	.80	.63	2.19	1.23
子どもの乱暴な言葉遣いは, 遊びの一種に過ぎない	.74	.55	2.56	1.28
因子3—評価の歪み, $M=2.54$, $SD=2.67$, α 係数=.68				
友だちが汚い言葉を使っていれば, 子どもが汚い言葉を使うようになることは責められない	.66	.44	2.51	1.33
仲間が犯した危害のほんの一部にしか関係していない子を責めることは公平で	.65	.43	2.65	1.22
人を叩くことに比べれば, 物を壊すことはたいしたことではない	.59	.35	2.48	1.31

注)得点は1点から6点の間に分布する。

Table 2 社会道徳的判断尺度の確証的因子分析の結果

項目	確証的因子分析結果			
	負荷量	共通性	平均値	標準偏差
因子1—moral, $M=4.40$, $SD=0.71$, α 係数=.73				
親の財布から黙ってお金を抜き取る	.68	.47	4.51	0.82
ネットで調べた情報を自分のレポートに無断で(引用文献を示さず)借用する	.64	.41	4.13	1.00
人のブログ(ネット上の日記)に, 匿名で根拠のない悪口を書き込む	.76	.58	4.55	0.81
因子2—conventional, $M=3.54$, $SD=0.81$, α 係数=.64				
人と食事中に, スマホでメールをする	.65	.42	3.30	1.07
目上の人に“若者言葉”で話をする	.65	.42	3.68	1.05
ゴミの収集日以外の日の夜にこっそりゴミ出しをする	.54	.29	3.63	1.09
因子3—personal, $M=1.77$, $SD=1.00$, α 係数=.89				
腕にタトゥーを入れている人と友達になる	.83	.68	1.92	1.19
髪を派手(オレンジやピンク)に染める	.90	.81	1.64	1.05
就活のため, まぶたを二重にするための整形手術を受ける	.84	.70	1.76	1.09
因子4—prudential, $M=2.89$, $SD=0.95$, α 係数=.63				
“ジャンクフード”(高カロリー・多くの添加物含有のインスタント食品・スナック菓子・ファースト・フードなど)を毎日食べる	.75	.56	2.37	1.27
痩せようと思い, 一日一回しか食事をとらない	.60	.35	3.10	1.29
カードローンをしたお金で(借金して)観光旅行に行く	.47	.22	3.20	1.21

注)得点は1点から5点の間に分布する。

2-3 結果と考察

(1) 社会道徳的判断傾向と道徳的不活性化傾向との相関

道徳的不活性化と社会道徳的判断尺度について、下位尺度ごとに評定値の平均値を算出し、それらを尺度得点とした。そして、年齢と性を統制した下位尺度得点間の偏相関係数を算出した。この結果は Table 1-3 にまとめられている。全体的に、不活性化傾向が高くなるにつれて道徳領域

での判断は悪くない方向に強くなる一方で、個人領域での判断は悪い方向に強くなっている。相関係数が.3以上の関係は、「正当化の歪み」と道德領域での悪さ判断 ($r = -.35$) と個人領域での悪さ判断 ($r = .43$) の間に認められた。つまり、「正当化の歪み」が高い者ほど、他者への危害を伴う場面でより悪くない判断し、個人の自由が許される場面ではより悪いと判断する傾向が認められた。道徳的不活性化傾向は道德領域と個人領域の判断を、方向は異なるものの、歪めるということが示された。

Table 1-3 道徳的不活性化得点と社会道徳的判断得点との相関係数 N=641

		道徳的不活性化 ^a			
			正当化の歪み	解釈の歪み	評価の歪み
			M	1.97	2.50
		SD	(0.99)	(1.04)	(0.99)
社会道徳的判断 ^b	道德	M	4.39		
		SD	(0.71)	-.35 **	-.14 **
	慣習	M	3.53		
		SD	(0.81)	-.01	-.08
	個人	M	1.78		
		SD	(1.01)	.43 **	.14 **
	自己管理	M	2.88		
		SD	(0.95)	.17 **	.00

* $p < .05$ ** $p < .01$

注) 年齢と性を統制した偏相関係数

^a 得点は1~6, ^b 得点は1~5の間に分布する。

(2) 道徳的自律タイプによる道徳的不活性化傾向の差違

① 道徳的自律タイプ

4つの領域別悪さ得点の標準化得点をもとに参加者をクラスター分析 (K-means 法) により分類した結果、先行研究 (Kusumoto et al., 2018; 首藤他, 2020a, 2020b) と同様の3つのタイプが見出された (Figure 1-1)。即ち、悪さ評定値が道德と慣習領域で高く個人領域で低いタイプの「領域対応型」(N=314)、個人領域と自己管理で悪さ評定値の高いタイプである「過剰抑制型」(N=157)、慣習領域と自己管理で悪さ評定値の低いタイプの「自由感肥大型」(N=175)であった。小学生から社会人までの年齢幅のある参加者を対象にした複数の研究において一貫して3つのタイプが認められたことは、「領域対応型」、「過剰抑制型」、「自由感肥大型」が道徳的自律タイプとして一般化できる可能性を示唆している。

② 道徳的不活性化傾向を従属変数とした分散分析

道徳的自律タイプを要因とする1要因3水準のANOVAの結果、3つの歪み得点のすべてにおいて主効果が有意になった (Table 1-4)。「正当化の歪み」と「評価の歪み」では過剰抑制型>自由感肥大型>領域対応型、「解釈の歪み」では過剰抑制型・自由感肥大型>領域対応型であった (Figure 1-2)。

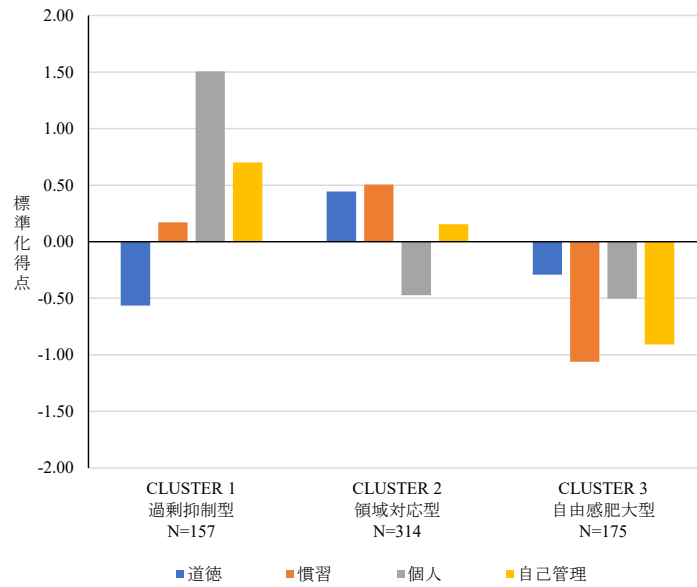


Figure 1-1 社会道徳的判断得点のクラスター分析の結果

Table 1-4 道徳的自律タイプごとの道徳的不活性化得点

道徳的自律タイプ	人数	正当化の歪み		解釈の歪み		評価の歪み	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
A 過剰抑制型	157	2.69	(1.17)	2.75	(1.06)	2.90	(1.09)
B 領域対応型	309	1.67	(0.75)	2.33	(0.98)	2.32	(0.93)
C 自由感肥大型	175	1.86	(0.87)	2.60	(1.07)	2.59	(0.92)
分散分析と 多重比較の結果		$F(2, 638)=68.35$ 偏 $\eta^2=.18, p<.001$		$F(2, 638)=9.63$ 偏 $\eta^2=.03, p<.001$		$F(2, 638)=19.00$ 偏 $\eta^2=.06, p<.001$	
		A>B **		A>B **		A>B **	
		A>C **		A, C		A>C **	
		B<C *		B<C *		B<C **	

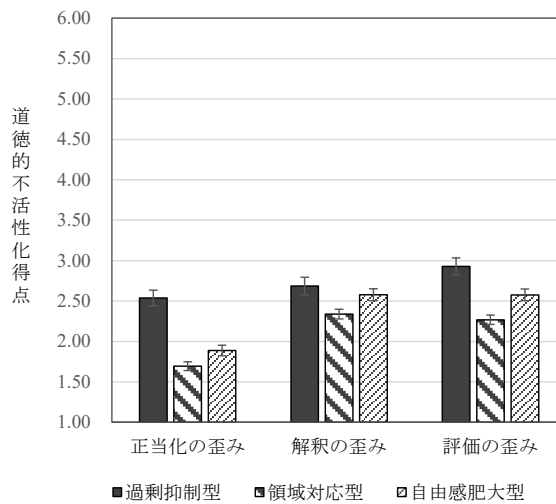


Figure 1-2 道徳的自律タイプごとの道徳的不活性化得点の差違 (エラーバーは標準誤差)

これらの結果は、道徳的自律の領域調整不全（過剰抑制型、自由感肥大型）の道徳的不活性化傾向が高いと予想した仮説と一致している。道徳的自律タイプの中で最も健全な領域対応型の不活性化傾向が一貫して低く、状況に応じて、他者や集団への悪影響を認知し社会的統制を受容したり、逆に規制からの自由感と個人の権利の感覚を發揮したりするタイプは社会的認知の歪みは小さいことが示されたといえる。

一方、領域調整不全タイプでは自由感肥大型よりも過剰抑制型の不活性化傾向の方が全体的に高かった。この結果は Hasebe, Nucci, & Nucci (2004) の結果とも一致する。彼らは、日本の高校生を対象にして、親の権限が子どもの個人的な問題にまで及び、子どもがその権威を受容せざるを得ないとき、子どもの心理的健康度が有意に低下することを見出した。過剰抑制型は一見、従順でよい子に見えるかもしれないが、心理的にも問題を抱え込むタイプであると考えられる。さらに、本研究結果からは過剰抑制型の若者は道徳領域の他者への危害という要素を過小に評価する社会的認知の歪みをもつタイプであることが示唆された。しかしながら、Kusumoto et al. (2018) は自由感肥大型の児童青年の方が学校適応の悪いことを示している。過剰抑制型と自由感肥大型がどのように社会的認知の歪みをもち、心理的健康に悪影響を及ぼすのかについて、今後更に検討を加えることが必要である。

3. 研究Ⅱ

3-1 目的

Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva, & Ditto (2011) は 5 つの道徳基盤を測定する尺度 (moral foundations questionnaire) を作成し、多くの研究者に影響を与えた (例えば, Basrli & Wright, 2012)。研究 2 では、この尺度で捉えた道徳的基盤と道徳的不活性化傾向との関連を分析することを目的とする。Graham et al. (2011) の道徳基盤尺度を日本人に適用し尺度の妥当性を検証した研究 (本田・石丸・宇津宮他, 2017; 村山・三浦, 2019) によると、道徳基盤の因子構造は概ね欧米の研究結果と一致するものの、5 つの基盤のうち神聖 (purity) の概念は日本人には馴染みが薄く、下位尺度として抽出するには妥当性に欠けることが示された。また各因子の内的整合性は高くなく、日本人用の新しい道徳基盤尺度の開発の必要性が示唆されている。しかし、諸外国との結果の比較をする際にはオリジナルな尺度を用いることが望ましいのは明らかである。道徳的不活性化は認知の歪みを、道徳基盤は直観をそれぞれ測定するため、研究 2 は異質なもの同士の関係を分析することになる。そのため、両者の関係についての仮説は特に設定されなかった。

3-2 方法

(1) 参加者

関東地区の A 大学から大学生 255 名 (1 年生 110 名、2 年生 80 名、3 年生 35 名、4 年生 30 名 ; 教育学部 113 名、経済学部 23 名、工学部 21 名、理学部 84 名、教養学部 13 名、未記入 1 名) が調査に協力した。男性 49 名、女性 106 名、平均年齢は 19.67 歳 ($SD=1.32$) であった。

(2) 質問項目

①道徳的不活性化尺度

研究 1 と同様の尺度が用いられた。研究 2 のサンプルで確認的因子分析を行った結果、十分な適合度と下位尺度の内的整合性の値を得ることができなかった。そこで、9 項目を 1 因子構造と

する分析を行ったところ、適合度の値 ($\chi^2=48.11$, $df=27$, $p<.01$; $CFI=.91$, $RMSEA=.06$, $SRMR=.05$, $CFI=.96$) と尺度の内的整合性 ($\alpha=.62$) も低くないことが示されたため、研究 2 では 9 項目の評定の平均値を不活性化傾向得点 ($M=0.49$, $SD=0.27$) とした。

②道徳基盤尺度

Graham et al. (2011) の尺度の邦訳版 (MFQ30) と実施要項は開発者によりウェブサイト (MoralFoundations.org, 2013) で一般公開され、入手可能であった。MFQ は第 1 部 (15 項目) と第 2 部 (15 項目) に分かれており、第 1 部では道徳的な善悪判断をする際の観点の評価 (質問「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するとき、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係しますか。」、例「権威に対する敬意が欠落していたかどうか」)、第 2 部では道徳的判断への同意度 (質問「次の文を読んで、あなたがどの程度同意するかどうかを教えてください。」、例「子供たちは皆、権威を尊敬することの大切さを教わるべきだ。」) を求めるものであった。いずれも 5 段階評定 (観点 1:全く関係がない~5:とても関係がある、判断 1:全く同意しない~5:非常に同意する) である。

研究 2 の参加者において観点評価と判断評価を合わせた 30 項目で確証的因子分析を行った結果、5 因子構造の適合度は低かった ($\chi^2=1288.55$, $df=395$, $p<.001$; $CFI=.61$, $RMSEA=.10$, $SRMR=.11$)。クロンバックの α 係数は「ケア/危害」.62、「公正/互惠性」.56、「内集団/忠誠」.63、「権威/尊敬」.60、「神聖/尊厳」.55 であり、下位尺度の内的整合性は高いとはいえない。これらの結果は観点評価と判断表別に分析しても同様であった。研究 2 では因子構造の適合度と下位尺度の内的整合性に限界があることを踏まえ、オリジナル尺度と同様に、下位尺度項目の評定値の平均値を尺度得点として算出した。

(3) 手続き

質問票は授業の中で配布され、授業後の空き時間に実施後、回収された。また質問票と同じものを Google Form 上に作成し、オンラインでも回答できるようにした。回答時間は約 10 分であり、回収率は 88.55%であった。

(4) 倫理的配慮

無記名式の調査であった。教示文の中で、回答は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、授業の成績・出席とは関係しないことが強調された。回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなした。

3-3 結果と考察

(1) 下位尺度の平均値と性差、及び相関関係

道徳的不活性化と道徳基盤の尺度得点は Table 2-1 にまとめられている。道徳的不活性化傾向は男子 ($M=0.59$, $SD=0.29$) の方が女子 ($M=0.46$, $SD=0.26$) よりも有意に高かった ($t=2.93$, $df=235$, $p<.01$)。この結果は首藤・利根川・樟本 (2021) と同様であり、認知の歪みは男子の方が強いというジェンダー差はサンプルが異なっても一貫して認められることを示唆している。道徳基盤の尺度には有意な性差は認められなかった。研究 2 の参加者の道徳基盤は「ケア/危害」と「公正/互惠性」の強いプロフィールであり、Haidt (2012/2014) でのリベラル派のパターンに近いといえる。これは大学生の特徴を反映しているのかもしれない。

男女とも、道徳的不活性化傾向は道徳基盤の「ケア/危害」(男性 $r=-.30$, $p<.05$ 、女性 $r=-.14$, $p<.1$) と「公正/互惠性」(男性 $r=-.29$, $p<.05$ 、女性 $r=-.14$, $p<.1$) と負に有意に相関していた

(Table 2-2)。他者への被害と思いやり違反、及び不公平は道徳基盤を代表する狭義の道徳領域であり、時代や年齢、ジェンダー、及び政治的態度に関わりなく、悪さ判断と直結する (Haidt, 2013)。道徳基盤の中でも最も道徳的要素の強い基盤に道徳的不活性化が負に関係することは、道徳的不活性化傾向の強さは道徳的判断に歪みを生じさせる要因になることを示唆している。

Table 2-1 道徳的不活性化尺度と道徳的基盤尺度の平均値と性差

	有効N	平均値	標準偏差	最小値	最大値	性差
道徳的不活性化傾向	252	0.49	0.27	0.00	1.44	男 > 女 **
道徳的基盤						
ケア/危害	252	22.67	4.04	7.00	30.00	n.s.
公正/互惠性	251	20.94	3.74	7.00	30.00	n.s.
内集団/忠誠	254	16.94	4.18	6.00	30.00	n.s.
権威/尊敬	252	16.45	4.21	3.00	30.00	n.s.
神聖/尊厳	246	18.39	3.75	8.00	30.00	n.s.

** $p < .01$

Table 2-2 道徳的不活性化と道徳的基盤の尺度間の相関係数

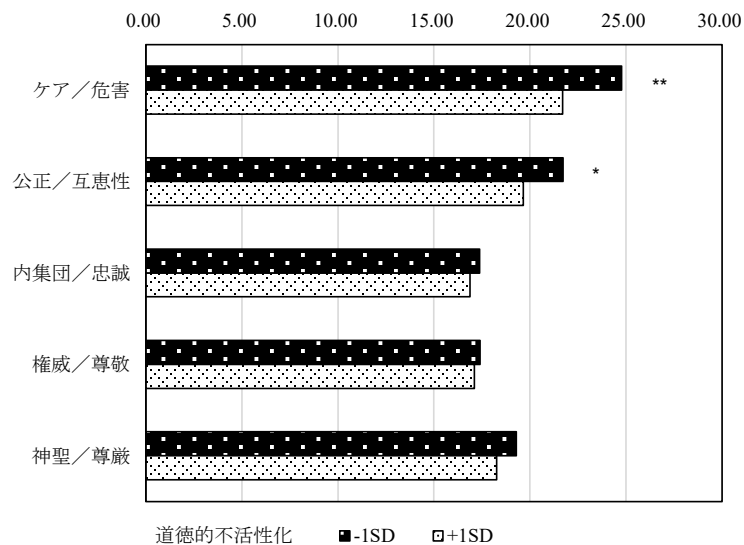
道徳的不活性化傾向	道徳的不活性化傾向	道徳的基盤				
		ケア/危害	公正/互惠性	内集団/忠誠	権威/尊敬	神聖/尊厳
道徳的不活性化傾向		-.14 ⁺	-.14 ⁺	.03	.04	-.02
ケア/危害	-.30 [*]		.73 ^{**}	.50 ^{**}	.47 ^{**}	.66 ^{**}
公正/互惠性	-.29 [*]	.41 ^{**}		.48 ^{**}	.43 ^{**}	.61 ^{**}
内集団/忠誠	-.10	.29 [*]	.44 ^{**}		.72 ^{**}	.60 ^{**}
権威/尊敬	.08	.33 [*]	.39 ^{**}	.56 ^{**}		.65 ^{**}
神聖/尊厳	-.09	.38 ^{**}	.54 ^{**}	.49 ^{**}	.61 ^{**}	

注) 下段は男性(有効N=48)、上段は女性(有効N=198)の年齢を統制した偏相関係数

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 2-3 道徳的不活性化の高低群ごとの道徳的基盤の平均値と標準偏差、及び分散分析の結果

道徳的基盤	道徳的不活性化	有効N	平均値	標準偏差	道徳的不活性化群の主効果
ケア/危害	-1SD未満	27	24.78	2.99	$F(1, 73)=8.79, p < .01, \text{偏}\eta^2=.11$
	+1SD以上	50	21.70	4.27	
公正/互惠性	-1SD未満	26	21.73	2.99	$F(1, 72)=3.97, p < .05, \text{偏}\eta^2=.05$
	+1SD以上	50	19.66	4.14	
内集団/忠誠	-1SD未満	26	17.38	4.79	$F(1, 73)=0.48, n.s.$
	+1SD以上	50	16.88	4.03	
権威/尊敬	-1SD未満	27	17.41	5.26	$F(1, 72)=0.33, n.s.$
	+1SD以上	49	17.10	3.87	
神聖/尊厳	-1SD未満	27	19.30	3.09	$F(1, 70)=1.39, n.s.$
	+1SD以上	47	18.26	3.96	



** $p < .01$ * $p < .05$

Figure 2-1 道徳的不活性化の高低群ごとの道徳的基盤

(2) 道徳的不活性化の高低群ごとの道徳的基盤の平均値と分散分析

道徳的不活性化傾向の全体平均値 ($M=0.49$, $SD=0.27$) から $\pm 1.0SD$ を基準に参加者を 2 群に分類した。高不活性化群は 47 名 ($M=0.91$, $DF=0.16$)、低不活性化群は 27 名 ($M=0.10$, $DF=0.04$) であり、男性の 84.21% が高不活性化群、女性の 41.38% が低不活性化群であった ($\chi^2=4.12$, $df=1$, $p < .05$)。不活性化群ごとの 5 つの基盤得点の平均値と標準偏差は Table 2-3 に示されている。2 (性) \times 2 (不活性化群) の分散分析の結果、「ケア／危害」($F(1, 73)=8.79$, $p < .01$, $\text{偏}\eta^2=.11$) と「公正／互惠性」($F(1, 72)=3.97$, $p < .05$, $\text{偏}\eta^2=.05$) で不活性化群の主効果が有意になった。いずれも高不活性化群の方が基盤得点は低かった (Table 2-3, Figure 2-1)。

相関係数と分散分析の結果から、道徳的不活性化傾向の強い個人は「ケア／危害」と「公正／互惠性」の基盤が相対的に弱いことが示された。道徳的不活性化の高さは道徳的判断に歪みをもたらすことの妥当性が、基盤理論からも示唆されたと解釈できる。この 2 つの基盤はどの文化やどの階層にもみられるが特に欧米のリベラル層において顕著である (Graham, Haidt, & Nosek, 2009; Haidt, 2013) とされている。一方、「内集団／忠誠」、「権威／尊敬」と「神聖／尊厳」は集団主義社会で広く支持されており、欧米では保守主義層においては「ケア／危害」と「公正／互惠性」と同程度に支持されている (Haidt, 2013)。これらの知見に基づくと、研究 2 の高不活性化傾向群では 5 つの基盤のうち集団主義社会で顕著に高いとされる 3 つの基盤が相対的に強いことになる。Haidt (2012/2014) は道徳基盤が個人レベルで存在しているだけでなく、集団内の類似性を高め、人々の同調性を強めることで、集成的に基盤が活性化されると考えている。つまり道徳基盤理論では個人レベルと集団レベルで道徳的活性化と不活性化を考えることができる。本研究結果から、欧米の保守主義層や集団主義社会では道徳的不活性化傾向が高いということはいえないものの、基盤理論での集成的な基盤の形成と共有についての仮説を考慮すると、集団秩序を重視する社会や保守的という同質な価値観を所有する集団では、道徳領域の思考を不活性化させる社会的な認知の歪みが、文化的な信念として共有されている可能性はある。個人レベルにおいても、

不活性化傾向は5つの基盤プロフィールに差違を生じさせ、その結果、個人の道徳的推論や道徳的自己、あるいは道徳的アイデンティティに影響を及ぼしている可能性はある。基盤プロフィールのパターンが個人の生き方とどのように関連するかについては、今後の研究を待たなければならない。

Barli & Wright (2012) は道徳基盤とコールバーグの道徳発達段階課題 (Rest, Narvaez, Bebeau, & Thoa, 1999) との関連を分析し、「ケア／危害」と「公正／互惠性」を「内集団／忠誠」、「権威／尊敬」、及び「神聖／尊厳」よりも優位に見なす程度が後慣習的な道徳推論と有意に関連することを見出した。道徳基盤は判断と推論よりも先に生じる直観を生み出す心的モジュールと仮定されているものの、基盤と判断・推論とは関連し合うことは確かである。基本的な道徳領域の高い基盤プロフィールが高次の道徳的推論と関係するという Barli & Wright (2012) の結果は本研究結果とも関連している。

4. 総合的考察

4-1 道徳的不活性化モデル、社会的領域理論、及び道徳基盤理論の類似性

本論文は、道徳的判断に至る社会的認知に歪みをもたらす道徳的不活性化を取り上げ、その不活性化と道徳的判断パターンからみた道徳的自律との関連、及び判断より先に生じる直観 (Haidt, 2001, 2008) のもととなる道徳基盤との関係を検討した。研究1では、道徳的自律の領域調整不全 (過剰抑制型、自由感肥大型) の道徳的不活性化傾向が高く、道徳的自律タイプの中で最も健全な領域対応型の不活性化傾向が一貫して低いことが見出された。他者の苦痛や不公平、集団秩序の乱れや自己の健康被害という多様な要素のある状況の特質に応じて、他者や集団への悪影響を認知し社会的統制を受容したり、逆に規制からの自由感と個人の権利の感覚を発揮したりする自律タイプは社会的認知の歪みも小さいことが示されたといえる。研究2では、道徳的不活性化傾向の強い個人は「ケア／危害」と「公正／互惠性」の基盤が相対的に弱いことが示された。道徳的不活性化は、これらの最も基本的な道徳領域の判断に歪みをもたらす直観の基盤を低下させることが示唆された。

道徳的不活性化は社会的学習理論を、社会的領域理論は認知発達論を、道徳基盤理論は社会心理学と文化人類学をそれぞれ背景にもち、心理学の歴史上それらの理論的根拠は大きく異なるといえる。しかしながら、道徳的不活性化と領域概念の調整不全とはどちらも社会的認知のプロセスについての構成概念である。さらに、道徳基盤も判断に直結する直観という認知と感情の融合した心的プロセスを扱っている。3つの理論の背景は異なるものの、判断を活性化、あるいは不活性化させる認知については3者での重なり度合いは大きいと考えられる。道徳的不活性化の特徴は、正当化や状況の再解釈により道徳的思考が不活性化され、非人間的な判断や行為 (例. 被害者を援助しない、制裁のひとつとして仲間はずれにする) を遂行した後も、個人の道徳的思考自体が低下することではなく、自尊心やアイデンティティも維持されるという点にある (Bandura, 2016)。今後は、認知の歪みと判断、及び人格的な要因も取り入れた研究により、3者の理論的な類似性について検討を加える必要がある。

4-2 道徳的自律を核とした理論的な統合の方向性

社会的領域理論では、領域調整の過程に「行為の意味づけ」という「仮説推論 (informational

assumption)」（Turiel, 2002; Wainryb, 2006）の認知過程が媒介すると考える。「他人をいじめる人は攻撃されても当然だ」、「体罰はしつけである」、「人はいじめられて強くなる」という推論が仮説推論であり、領域調整不全をもたらす要因である。この仮説推論こそが道徳的不活性化をもたらす認知の歪みであると捉えることができるだろう。歪んだ仮説推論が道徳的不活性化をもたらす例として、金綱・濱口（2019）は中学生を対象にした研究から、報復的な攻撃行動が道徳領域ではなく慣習領域や個人領域から正当化された場合に、攻撃行動は許容されやすいことを見出している。道徳、慣習、そして個人という3つの領域概念は文化に共通して認められるものの、その領域概念を活性化させる仮説推論の根拠は曖昧である。それは宗教、科学や教育の影響を受けるため、文化、時代、個人の生活経験による差異が大きい。その結果、解釈と判断、行動に文化差、時代差、及び個人差が認められる（Turiel, 2002）。今後、仮説推論の個人差の大きい場面の特徴、仮説推論の個人差や世代差、及び仮説推論の変容による感情と判断の変化を扱うことにより、道徳的不活性化の過程を社会的領域理論に内包させることができると思われる。

Kusumoto et al. (2018)と首藤他(2020b)は、小学生から大学生を対象にした研究から、道徳的自律には領域対応型、過剰抑制型、自由感肥大型という3つのタイプが存在することを見出した。自由感肥大型は学校適応が最も悪く（Kusumoto et al., 2018）、過剰抑制型は幼少期に「脅しのしつけ言葉」（例、「ご飯粒を残すと目がつぶれる」等の俗信的しつけ言葉）を受けた経験が多いこと（首藤他, 2020b）が報告されている。2つの領域不全のタイプは道徳的不活性化傾向も高い（研究2）ことから、認知の歪みをもたらす養育経験と仮説推論との関連、及びその後の領域調整不全、更にそれらと友達関係との関連などを調査することで、道徳的不活性化モデルと社会的領域理論を統合した道徳的自律の発達を検討できると考えられる。

社会的領域理論（Turiel, 2002, 2008b; Wainryb, 2006）では社会道徳的逸脱を伴うトリガー・イベントに呼応して、領域概念が活性化され、複数の領域概念が調整されて判断が行われると考えられているように、社会的認知の過程が重視される。この社会的認知の過程を重視するのはBandura (2016)の道徳的不活性化モデルでも同様である。どちらも「悪いことの原因があつて判断が行われる」過程を扱っているといえる。一方、社会的直観者モデルでは「理由は分からないが悪いことは分かる」状態を説明できるという（寺井, 2009）。この「適切な理由は見つからないが、悪いことであり、なんとなく気持ち悪い」という状態はPiagetに始まる「理性論者モデル」では道徳の問題として扱うことはできないのに対して、直観論者モデルでは「神聖／尊厳」という道徳基盤の表れであるとし、この状態の特徴的な感情は「嫌悪感」と仮定されている（Haidt, 2001）。5つの道徳基盤は進化論的な根拠を有する（Haidt, 2001, 2008; Haidt & Bjorklund, 2007）と仮定されており、多くの文化の元で5つの基盤の妥当性が確認されているとはいえ、日本人を対象にした先行研究（村山・三浦, 2019）によると、神聖に関しては日本人の観念を心理学的に探求し、基盤としての位置づけを再検討することが求められている。この「神聖／尊厳」基盤は社会的領域理論における個人領域と慣習領域の両方の特徴を持った混合領域に相当すると考えることができる。混合領域とは、出来事の種類カテゴリー名ではなく、複数の領域概念を調整する際に働く思考を指す（Turiel, 2008b）。典型的な出来事は、宗教と文化（例、「鳥居をくぐるときに礼をする」）、人とのつきあい方や生活の仕方について自分なりにルールを設けている場合に生じる領域調整場面である。このような場面で自分なりの規範をもつ個人は、それから逸脱する人を見ると嫌悪感をもつことになり、基盤理論（Haidt, 2008）のいうところの「神聖／尊厳」基盤が賦活し、「なんだか気持ち悪いから悪いことだ。しかし道徳的には責められない」という判

断が生じる。このような判断には社会的直観論者のように「直観が先で判断が後」とは単純に決まるのではなく、感情と認知が瞬時に相互作用し、感情価のある判断が生じると捉えることもできる (Turiel & Killen, 2010)。仮説推論 (文化的な信念や歪みのある認知)、感情、判断の関係、それらの個人差や文化差を詳細に分析することにより、基盤と領域概念、及び領域調整との関係にアプローチでき、新しい道徳性の統合理論を誕生させることができるかもしれない。

引用文献

- Bandura, A. (1999). Moral disengagement in the perpetration of inhumanities. *Personality and Social Psychology Review*, 3, 193-209.
- Bandura, A. (2002). Selective Moral Disengagement in the Exercise of Moral Agency. *Journal of Moral Education*, 31(2), 101-119.
- Bandura, A. (2016). *Moral disengagement: How people do harm and live themselves*. New York, NY: Worth publishers.
- Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 364-374.
- Bandura, A. McAlister, A., & Owen, S. (2006). Mechanisms of moral disengagement in support of military force: The impact of September 11. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 25, 141-166.
- Baril, G. L., & Wright, J. C. (2012). Different types of moral cognition: Moral stages versus moral foundations. *Personality and Individual Differences*, 53, 468-473.
- Bussey, K., & Bandura, A. (1999). Social cognitive theory of gender development and differentiation. *Psychological Review*, 106, 676-713.
- Gini, G., Pozzoli, T., & Hymel, S. (2014). Moral Disengagement Among Children and Youth: A Meta - Analytic Review of Links to Aggressive Behavior. *Aggressive Behavior*, 40, 56-68.
- Graham, J., Haidt, J., and Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 1029-1046.
- Graham, J., Nosek, B., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101(2), 366-385.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108, 814-834.
- Haidt, J. (2008). Morality. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 65-72
- Haidt, J. (2014). *社会はなぜ左と右に分かれるのか* (高橋洋, 訳) . 東京:紀伊國屋書店. (Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York, NY: Vintage.)
- Haidt, J. (2013). Moral psychology for the twenty-first century. *Journal of Moral Education*, 42(3), 281-297.
- Haidt, J., & Bjorklund, F. (2007). Social intuitionists answer six questions about morality. In W. Sinnott-Armstrong (Ed.), *Moral psychology, Vol. 2: The cognitive science of morality* (pp. 181-217). Cambridge, MA: MIT Press.
- Haidt, J., & Graham, J. (2007). When morality opposes justice: Conservatives have moral intuitions that liberals may not recognize. *Social Justice Research*, 20, 98-116.

- Hasebe, Y., Nucci, L., & Nucci, M. S. (2004). Parental control of the personal domain and adolescent symptoms of psychopathology: A cross-national study in the United States and Japan. *Child Development, 75*, 815-828.
- 平山るみ・楠見孝.(2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討—. *教育心理学研究, 52*, 186-198.
- 本田志穂・石丸彩香・宇津宮沙紀・山根倫也・小田美優・坂本和久・大江慶寛・小林仁美・有馬多久充・本寺碧・小杉孝治.(2017). 日本人にとって道徳はどのようなものとしてとらえられているか：新しい道徳基盤尺度項目の開発を通じた検証. *山口大学教育学部研究論叢 (第3部)*, 66, 95-106.
- 金網祐香・濱口佳和.(2019). 攻撃行動に対する中学生の善悪判断と判断に影響を与える要因の検討. *教育心理学研究, 67*, 87-102.
- Killer, B., Bussey, K., Hawes, D., & Hunt, C. (2019). A meta-analysis of the relationship between moral disengagement and bullying roles in youth. *Aggressive Behavior, 45*, 450-462.
- Kusumoto, C., Ueoka, K., Tonegawa, T., & Shuto, T. (2018). Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy. *岡山県立大学保健福祉学部紀要, 25(1)*, 49-64.
- MoralFoundations.org. (2013). Questionnaires. *MoralFoundations.org*. Retrieved from <http://moralfoundations.org/questionnaires>. (September 15, 2017.)
- 村山綾・三浦麻子.(2015). 被害者非難と加害者の非人間化—2種類の公正世界信念との関連—. *心理学研究, 86*, 1-9.
- 村山綾・三浦麻子.(2019). 日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証. *心理学研究, 90(2)*, 156-166.
- 日本道徳性心理学研究会編.(1992). *道徳性心理学*. 京都: 北大路書房.
- 西野泰代・若本純子.(2019). 小中学生におけるいじめとモラルディスエンゲージメントとの関連 (1)—いじめ場面での防衛行動とモラルディスエンゲージメント—. *日本発達心理学会第30回大会発表論文集*, 213.
- Piaget, J. (1953). *児童の道徳的判断の発達* (大伴 茂, 訳). 東京: 同文書院. (Piaget, J. (1932). *Le jugement moral chez l'enfant*. Genev: Institut J. J. Rousseau.)
- Rest, J., Narvaez, D., Bebeau, M. J., & Thoma, S. J. (1999). *Postconventional moral thinking: A neo-Kohlbergian approach*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- 首藤敏元.(2013). 道徳性. 藤永保監修、内田伸子・繁耕算男・杉山憲司責任編集. *最新心理学事典* (pp.558-559), 東京: 平凡社.
- 首藤敏元・二宮克美.(2002). *子どもの道徳的自律の発達*. 東京: 風間書房.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美.(2020a). 小学生における対人的攻撃場面での社会道徳的領域調整の発達. *埼玉大学紀要教育学部, 68(2)*, 21-31.
- 首藤敏元・利根川智子・上岡紀美・樟本千里.(2020b). 大学生における幼少期に受けた俗信的しつけの経験と現在の道徳的判断タイプとの関連. *埼玉大学紀要教育学部, 69(2)*, 135-142.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里.(2021). 日本の若者の道徳的認知の歪み—道徳的不活性化尺度の開発—. *埼玉大学紀要教育学部, 70(2)*, 印刷中.
- 寺井朋子.(2009). Haidtの社会的直観者モデルについての一考察—モデルが道徳性研究に与える影響とこれからの道徳性研究の方向性—. *モラロジー研究, 63*, 109-124.
- 田村紋女・小塩真司・田中圭介・増井啓太・ジョナソン ピーター カール.(2015). 日本語版 Dark

- Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 24, 26-37.
- Turiel, E. (2002). *The culture of morality: Social development, context, and conflict*. Cambridge, England: Cambridge university press.
- Turiel, E. (2008a). Thought about actions in social domains: Morality, social conventions, and social interactions. *Cognitive Development*, 23, 136-154.
- Turiel, E. (2008b). The development of children's orientations toward moral, social, and personal orders: More than a sequence in development. *Human Development*, 51, 21-39.
- Turiel, E. & Killen, M. (2010). Taking emotions seriously: The role of emotions in moral development. Arsenio, W. F., & Lemerise, E. A. (Eds.), *Emotion, Aggression, and Morality in Children: Bridging Development and Psychopathology* (pp.33-5). American Psychological Association.
- Wainryb, C. (2006). Moral development in culture: Diversity, tolerance, and justice. In M. Killen & J. G. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*, (pp.211-240), Mahwah, NJ: Erlbaum.
- 吉澤寛之・吉田俊和. (2004). 社会的ルールの知識構造から予測される社会的逸脱行為傾向—知識構造測定法の簡易版と認知的歪みによる媒介過程の検討—. *社会心理学研究*, 20, 106-123.

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げる次第である。

付記

本研究の一部は JSPS 科研費 JP17H02629 の助成を受けた。

(2021年9月30日提出)
(2021年11月10日受理)

Characteristics of Moral Disengagement from the Framework of Moral Autonomy and Moral Foundations

SHUTO, Toshimoto

Saitama University, Faculty of Education

TONEGAWA, Tomoko

Tohoku Fukushi University, Faculty of Education

KUSUMOTO, Chisato

Okayama Prefectural University, Faculty of Health and Welfare Science

Abstract

Two studies examined how moral disengagement, which distorts social cognition leading to moral judgment, is associated with moral autonomy in terms of moral judgment patterns and the moral foundations that give rise to intuition. Study 1 examined the relationship between the moral disengagement tendency and socio-moral domain coordination. A total of 647 participants, including 200 high school students, 247 college students, and 200 working adults aged 18 to 22, responded to the moral disengagement scale and the socio-moral judgment scale. It was found that the disengagement tendency score was significantly negatively correlated with the moral domain score ($r = -.13$ to $-.34$), and the morally autonomous type (domain-consistent type, $N=309$) had a significantly lower disengagement tendency score than the morally dysregulated type (suppressive type, $N=157$ and excessive feelings of freedom type, $N=175$). It was suggested that the morally autonomous type, those who recognize the negative effects on others and accept social control, and exerts a sense of freedom from social regulation and a sense of individual rights depending on situational elements, has less distortion of social cognition. Study 2, in which 255 university students ($M_{\text{age}}=19.37$) participated, examined the relationship between the moral disengagement tendency and the moral foundations. It was found that those with a strong tendency toward moral disengagement ($+1.0SD$) have a relatively weak foundation of "care/harm" and "fairness/reciprocity". It has been suggested that moral disengagement reduces the intuition bases on the most basic moral realms. Therefore, it was shown that domains dysregulation, moral foundations for intuition, and cognitive distortion in the self-regulation process overlap, even though the theoretical backgrounds are different. The possibility of a new integrated moral theory was considered.

Keywords : moral disengagement, social domain theory, moral autonomy, moral foundations, Japanese youth